

遊歴算家「山口和」と八戸

今井 悠人
土屋 拓也

はじめに

和算とは、明治維新後に西洋数学が広く取り入れられた際に、西洋数学を指す洋算に対して作られた語である。通常は算術、算法、算学などと呼ばれ、独自の発展を遂げた江戸時代の数学を意味する。江戸時代に関孝和らにより大成し、方程式論や行列式に相当する点竄術、円周率や円の面積を扱う円理などがある。これら和算家の活躍によって、和算に対する概念が肯定的にとらえられるようになり男子だけではなく女子に至るまで、全国的に読み書きに加え算盤をはじめとした和算の入門を学ぶ意識が全国的にみられるようになった「1」。そのために幕末には女子を含めその識字率と数学能力は相当に高かったことが知られている。同時代の西洋数学と比べても同等かそれ以上の成果を上げていたが、体系的な教授法が乏しかったことや理論的方向に傾きすぎたこともあり、明治以降には実用性に優れる西洋数学にその地位を追われた。しかし、広く人々に数学的な考え方が根付いていたため、西洋数学の受容は極めて円滑に行われたといえる。

さて江戸時代の後半になると、街道が整備され各地への旅行がしやすくなった。交通や情報の伝達が現代ほど容易ではなかった時代において、各地を旅して和算を教えたり当地の和算家との交流を行ったりした和算家がいた。そのような者を遊歴

算家（周遊算家）という「2」。

本稿では江戸後期の遊歴算家として著名な山口和が諸国を巡った際の記録である「道中日記」をもとに、彼の八戸周辺における足跡と和算家を中心とした人々との交流について述べる。

遊歴算家とは

当時、日本各地に数学愛好家や数学塾を開く者がいた。遊歴算家との交流はそのような人々にとって江戸や大阪などの大都市における情報の摂取と、最先端の学問に触れる貴重な機会となっていた。遊歴算家は、各地の数学愛好者や有力者のもとを訪れて滞在させてもらう代わりに、和算の指南や情報の提供を行っていた。その中で、求めがあれば弟子としたり、複数回にわたりその地を訪れて指導を行なったりしていた。和算家同士が出会った場合には、お互いに問題を出し合うということも行われていた。出題から数日をおいて互いに術（解答にたどり着くまでの道筋）を示し合い、その実力を確かめた。武芸における道場破りのようなもので、負ければ相手の弟子になるということもあった。諸国を周遊して地方の優秀な和算家と論を交えることでお互いに高め合うという効果もあった。概ね化政年間以降、地方へ和算が普及した背景には、大都市における文化の発展・大衆化、商品の流通発展と交通の発達、地方における富商・豪商の増加、寺子屋をはじめとする初等教育の地方への普及などがあると考えられる「7」。代表的な遊歴和算家としては、大島喜侍¹、千葉胤秀²、山口和³、法道寺善⁴、小松惠龍（鈍斎）⁵、剣持章行⁶、佐久間鑽⁷らが挙げられる。この他にも多くの遊歴算家が地方で活動していたことは、奉納算額や地方資料から明らかであるし、無名や狭い地方を回っていた人々は、資料が散逸したりどこにも記録されずに終わってしまったりしたところであろう。そのような遊歴算家の中でも、本稿では山口和を取り上げる。後述するように、山口は旅日記という形で各地の足跡と人々との交流、各地で奉納された算額等について記しており、また八戸にも立ち寄っていることが日記から読み取れる。

ためである。

山口和について

山口和は越後国水原、現在の新潟県阿賀野市に生まれた（生年不明）。通称七右衛門、のち倉八、坎山と号した。江戸に出て日下誠（関流五伝）の門人、望月藤右衛門に学び、その後長谷川寛に師事した〔3〕。晩年は失明し、故郷の水原に帰り、嘉永三年七月に没した〔4〕。著書に「算法道行」または「廻國算法道行」、「周遊算草」、「道中日記」がある。「山口倉八（長谷川門人） 山口氏廻國 算法道行」と題箋のある写本が、「算法道行」文政四辛巳年とある写本がそれぞれ東北大学に現存している。前者は一枚目裏に「文政四年より五年六年と廻國記之此書は山口氏長谷川先生へ國々より幸便乃砌差上候文言の寫に御座候」とあり、山口が長谷川寛へ宛てた書状の写を纏めたものとなっている。後者は特に問題と術を一部抜粋したものである。周遊算草は現存せず詳細は不明である。林鶴一によると「文化十三年一八一六ヨリ文政四年一八二二至ノルマデ六年間諸國ヲ遊歴シテ算題ヲ編集ス コレヲ周遊算草トイフ」〔5〕とあるが、これは道中日記を指したものであるように思われるが、その指すところは判然としない。本稿では道中日記を扱う。

道中日記とは

山口は文化十四年から文政年間にかけて全国を巡り、各地の弟子の指導と和算家との議論、各地の奉納算額の調査、さらには趣味であったと思われる俳諧に縁のある事績を尋ねるなど諸国の風物を楽しんだ。遊歴に関する詳細な記録は「道中日記」と題されて現存している〔6〕。

道中日記に記されている遊歴の記録は、その時期と地域により全六回に分かれている〔7、8〕。

第一回…文化十四年四月九日江戸を立出。常州の南西部と北総地方を回り、同年五月朔日に江戸神田鍋町に住む山口の師である長谷川寛宅に帰着。

第二回…文化十四年十月十四日に江戸を立出。常総から磐城、仙台、南部、陸奥、両羽と東北地方を廻り、再び磐城から常陸を経て、翌文政元年九月二十三日神田鍋町着。本稿ではこの第二回に訪れた八戸における足跡を取り上げる。

第三回…文政三年七月二十二日江戸を立出。上信越から北陸、近畿、四国、九州は長崎、天草、熊本まで巡り、山陰を経由し京、近江、東海道を経て文政五年十二月朔日江戸青山三筋町の浅川宅に着いた。

第四回…文政六年二月五日に江戸を立出。常陸から会津を通り越後に出て各地に逗留。越年の後、信州、上州、野州を通り、その後に常州を巡回、文政七年十月十九日江戸神田鍋町着。

第五回…文政七年十一月朔日に江戸青山を立出。信州から越後に出てそこで越年。常陸に出て磐城の南の方へ弟子宅を巡回、再び越後に戻る。文政八年九月二十五日、越後国刈羽郡へ行く（本記述まで。以降の記述なし）。

第六回…文政十一年七月二十一日、越後国水原を立出。江戸へ出てから磐城地方の弟子宅を巡り、会津を通って同年十月五日暮六ツに水原へ帰着。

以上のように、第二回、第三回が日本の北から南までを回る大旅行となっている。なお、第四回以降はそれまでに各地で入門した弟子宅を回り、指導と交流を深めていたことが推察できる。

現在、道中日記は原本と写本一部（全六冊）のみが確認されている。原本〔6〕は、新潟県北蒲原郡旧水原町の水原町立博物館に所蔵されていたが、市町村合併に伴い旧水原町が阿賀野市となったことに伴い、新潟県阿賀野市水原ふるさと農業歴史資料館の所蔵となっている。原本は経年劣化が激しいため、本研究においては日本学士院所蔵の写本〔9、10〕を用いた。本写本は阿部克治が原本に忠実に写したもので、その奥付には

「新潟縣北蒲原郡水原町外城ノ人故山口倉八字ハ和坎山ト號ス

同氏手記ノ旅行日誌ヲ謄寫ス本旅行日記中文字ノ誤謬若クハ落字等往々

認ムルト雖モ命ニ從ヒ原本原字ノ形体ニ倣ヒ書寫ス焉

北越水原町河童河畔寓

咬菜菴鐵人

安部克治識（印）

とある。なお、本写本を作成した安部克治については詳ではない。

道中日記卷末には「算学門人控」と「算者控」として山口と関わりのあつた和算家が挙げられている。算学門人控には、山口が遊歷を通じて門人とした者百二十六人の氏名と在所が記されており、八戸に関連する人物としては「奥州五戸郡市川村南部 吉田幸吉」「9」の名がある。算者控には山口と関わりのあつたと思われる諸国の和算家二百十四名（うち渡人として在所のみで氏名のない者が三人）の流派、氏名、在所が記されている。頭書にて記されている流派は、最上流、関流、算者、天文方、神道天文、算師、曆師、江戸算学師である。八戸に関連のある人物は、「南部八戸御藩中 中里保太夫」、「南部八戸御藩中隠居五戸郡北市川村住 宮川喜右衛門」「9」の二名が載せられている。

道中日記（文化十五年四月十九日から五月一日）〔9〕

十九日森岡出立にて同郡（岩手郡…著者注）艸下田村清右衛門方にて泊る。二十日廿一日廿二日出立一ノ戸本陣彌惣次方に泊る（此所より少し北福岡迄の間に峠あり其の上に波打坂末の松山と云ふあり）。廿三日八ノ戸郡青作り村（但し福岡より三里程北三ノ戸の南より八戸へ入る道あり）甚之助方に泊る。廿四日八ノ戸藩中里保太夫方へ行五戸郡濱市川村吉田源右衛門

方に泊る（但し小山田氏より中里氏田名部大畑町小山田同人森田屋五兵衛方手紙二通添る）。吉田源右衛門倅同光吉算術熱心にて八戸藩隠居當時北市川住宮川喜右衛門より學ぶ宮川北夷といふ（廿五日吉田氏方宮川氏来る初て會）。廿七日出立（宮川氏より百石村傳右衛門方手紙添る傳右衛門より相坂村丸屋又古方へ手紙添る）。廿八日夜七戸郡三本木村名主彌五助方に泊る。廿九日七戸通り抜け野邊地通り（旦し七戸より野邊地への間に坪村あり此村より肆里程北山の中に宮あり此宮の下土中に坪のいしぶみありといふ仙臺にあるは多賀城の碑なりといふ又宮の椽の下廻り板をはりてあり此石ぶみある故にかこへのためにて如此といふなり）北の郡有度村辰之助方に泊る。晦日同郡田名部元町木屋善兵衛方に泊る。五月一日同此所は松前氣屋也是れより通路みなと也。

読みやすさのため句点を附し、また、本文中送り仮名として用いられている片仮名は平仮名とした。また、本文と区別するために、割書を（ ）内に記した。

道中日記に現れる八戸と人々

道中日記によると、山口は次のような経路を通り盛岡の北にある下田村より下北半島の田名部まで北上している。下田村から一戸は奥州街道、福岡を通り八戸街道（登り街道）を使って八戸に至る。八戸から市川村を通り再び奥州街道へ戻り、清川村、三本木、七戸、野辺地に至る。野辺地からは田名部街道を通り、有度村を過ぎ田辺へと辿り着いた。なお、本節の地名表記は旧高田領取調帳データベース〔11〕、日本歴史地名大系〔12〕、角川日本地名大辞典〔13〕に拠った。

山口は文化十五年四月十九日に岩手郡下田村に到着し、同月二十二日出立し、一戸本陣に到着した。下田村（現盛岡市市川）は盛岡藩領沼宮内通に属す村で、北上川と松川の合流地点西側に広がり、北に奥州街道渋民宿と接する。西側には鹿角街道が

通るが、次の宿泊地が一戸であることから鹿角街道を通り浄法寺から浄法寺街道を逸れて月館を通り一户に向かう迂回路は使わなかったと判断した。なお、洪民宿は盛岡城下奥州街道盛岡宿の次の宿場町であり、山口は宿場町を避けて足を休めたことがわかる。一户村（現二戸郡一户町）は二戸郡のうち、盛岡藩領福岡通に属する。地内一户町は洪民宿、沼宮内宿に次ぐ奥州街道の宿場であり、洪民宿からは八里八町の道のりであった。

翌二十三日には泥障作村に泊まり、翌二十四日に五戸郡市川村に着。泥障作村（現八戸市南郷区泥障作）は三戸郡のうち、八戸城下の南西、頃巻沢川の左岸沿いの丘陵地に位置する。はじめ盛岡藩領であったが寛文四年「12」（寛文五年「13」）の八戸藩創設とともに八戸藩領となる。道中日記中に、「福岡より三里程北三ノ戸の南より八戸へ入る道あり」とあるのは八戸街道（登り街道）のことを指す。市川村は上市川村（現三戸郡五戸町上市川）と下市川村（現八戸市市川町）があり、南部家文書には両村とも市川と表記される例が多い。その場合には、単に上市川村を指す場合と、両村を合わせて市川村としている場合があるとされる「13」。両村とも三戸郡のうち、盛岡藩領五戸通に属する。五戸川（市川とも）の下流域に属し、五戸村の北東に位置する。五戸川の上流側を上市川村、下流川が下市川村と称する。下市川村の北端は奥入瀬川が東流し、東側は太平洋に面する。山口が宿泊した村を北市川村とする資料「8」も存在する。北市川は上市川村の集落の名と見えるものの、吉田源右衛門資料からも道中日記からも確定することができない。八戸城下から近いのは下市川村だが、奥州街道には上市川村の方が近い。その為、本稿では山口が宿泊した場所は上・下市川村のどちらかということにとどめる。

二十七日まで吉田源右衛門方に逗留し、二十八日夜に七戸郡三本木村着。三本木村（現十和田市三本木）は北郡のうち、盛岡藩領七戸通りに属する。奥入瀬川（相坂川とも）の北岸に位置し、奥州街道が貫いており藤島宿の北、七戸宿の南に位置する。

二十九日には七戸、野辺地を通り北の郡有度村に滞在。晦日には同郡田名部に辿り着いている。七戸（現上北郡七戸町）は北郡のうち、盛岡藩領七戸通に属する。奥州街道の宿駅でもあるため多くの商店や旅籠などがあり三斎市も開かれるなど発展をした。はじめ大塚屋が出て豪商として名を馳せたが、天保の七年飢饉や七代目盛田全の放蕩等により家勢が衰え、次いで船

木屋が随一の豪商となった。最盛期の船木屋は廻船業者として名を馳せ、野辺地に三隻の持ち船と三隻の備船、合計六隻の千石船を繋ぎ大坂との交易を行っていた。野辺地（現上北郡野辺地町）は北郡のうち、盛岡藩領野辺地通に属する。野辺地湊を交易港として日本海海運・北前船の要衝として発展した。天保六年盛岡藩御国中分限番附では関脇に野辺地の野村治三郎が、前頭筆頭に同所の西堀善兵衛が記される〔14〕など、盛岡藩中でも特に富商が多かったことが知れる。なお、大塚屋の盛田喜平治（盛喜）は前頭八枚目の市にあり、七戸中最大の商人として面目を保っている。有戸村（現上北郡野辺地町有戸）は北郡のうち、盛岡藩領野辺地通に属する。野辺地から田名部を結ぶ田名部街道筋の宿駅があり、野辺地の次、横浜の手前に位置する。田名部（現むつ市田名部町）は北郡のうち、盛岡藩領田名部通に属し、田名部町とも称される。江戸後期には北方警備の強化に伴い、七戸代官、三戸代官とともに田名部代官が重要視された。古くから下北の物資の集積地として経済的にも地域の中心地として栄えた。特に港がないにも関わらず廻船問屋が許され、田名部商人の名は広く知られていた。享和二年の「廻船文書」にある八名の廻船問屋の中に、山口が田名部で滞在したとみられる木屋の名が見える（木屋善三）。図1、2に、山口の足跡を示す。道中日記の記述により、山口が辿ったと考えられる道筋を赤線で記し、言及のある地名のうち要所を赤線で囲った。

図1 近世交通図(部分) 青森県 [13]

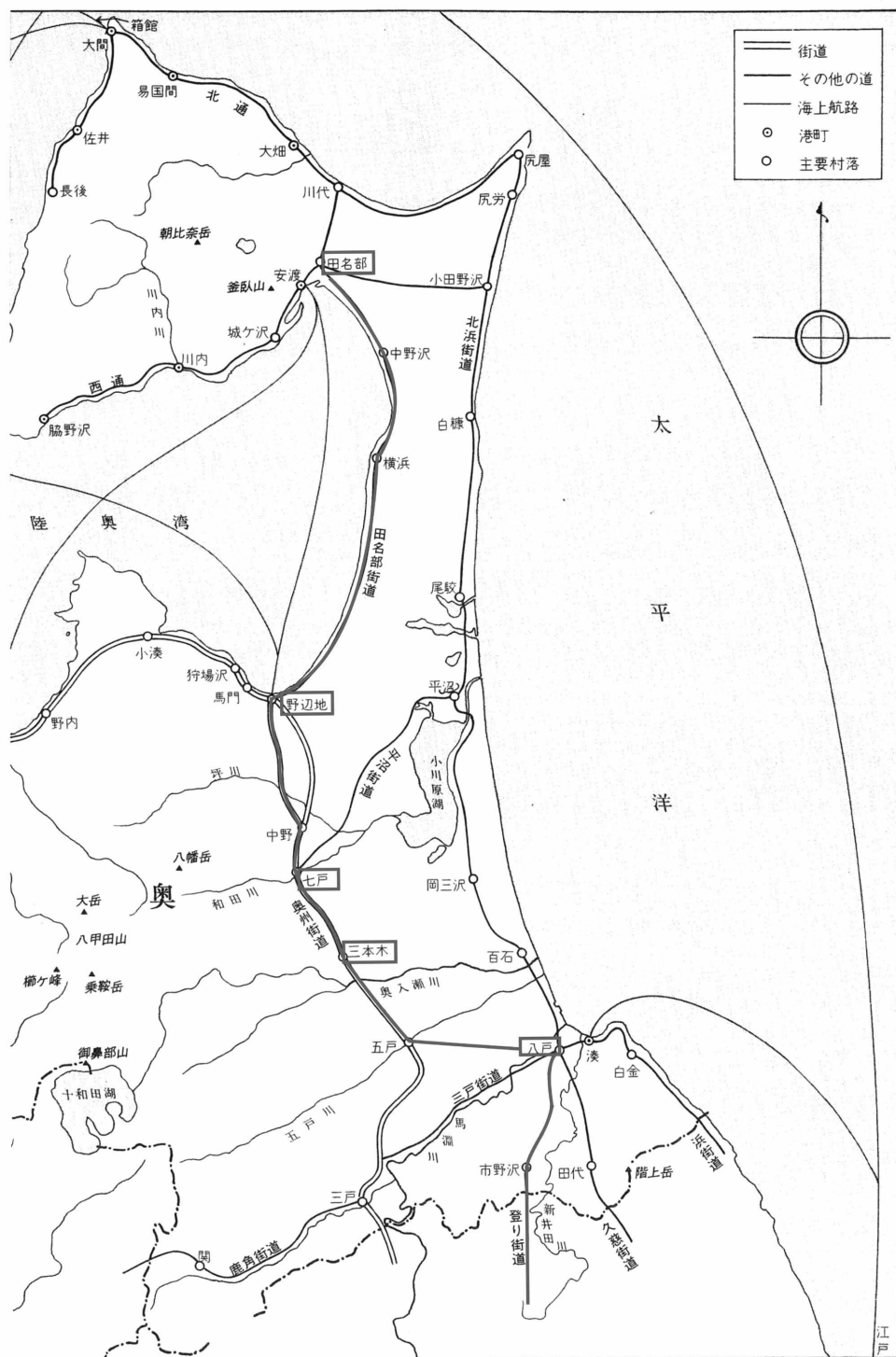
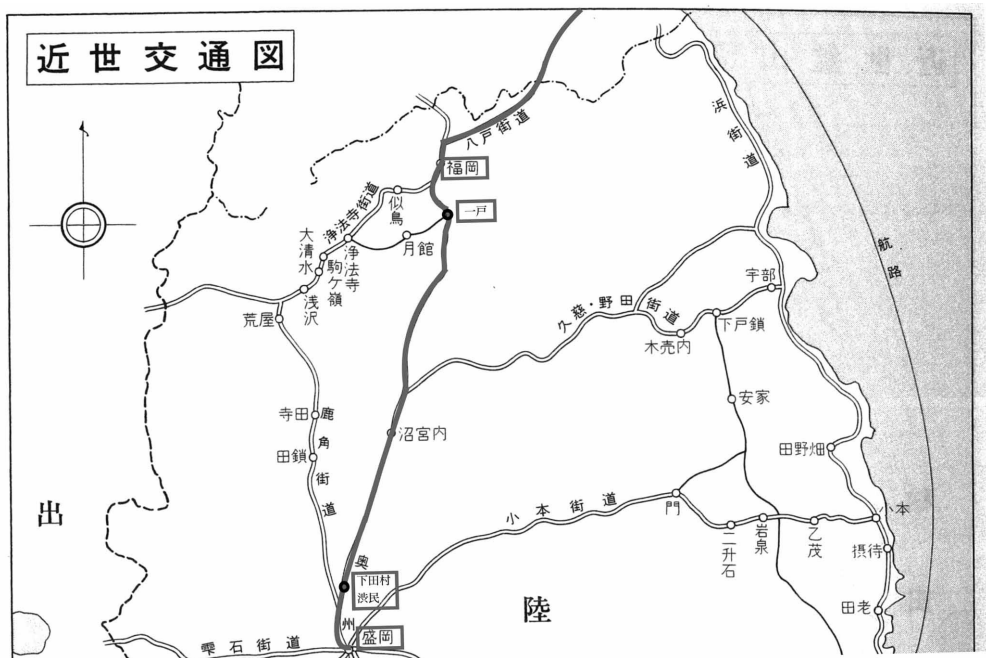


図2 近世交通図(部分) 岩手県 [13]



・吉田源右衛門

青森県史「15」によると、「八戸城下において酒造を希望する者は藩の許可を得て、酒箒（酒株）を取得し、それぞれ上箒・中箒・下箒・休箒（休業）に応じて御礼金を納めることになっていた。No300「五 箒上中下被仰付之事」によると、享保十一年（一二二六）、城下における酒造は三十七軒、上・中・下・休箒の合計は三十四本であった。

嘉永二年（一八四九）には、箒一本八石仕込みで、上箒が大塚屋村井市兵衛（四十本）・美濃屋金子宗七郎（四十本）、中箒が近江屋市太郎・西町屋石橋文蔵（三十五本）・大丸屋石橋善兵衛（三十五本）・種屋伝右衛門（三十本）・河内屋橋本八郎兵衛（十本）・湊村吉田源右衛門、下箒は城下以外の村方住居者であった（「勘定所日記」同年十一月十九日条）。これら城下の表通りに店を構えた大規模商人はその資本力を背景に酒造設備や技術者を揃え、領内における上・中級クラスの酒造をほぼ独占していたことがわかる。」とあり、吉田源右衛門は湊村の造酒家であったことがわかる。

しかし引用元である、勘定所日記「16」嘉永二年十一月十九日の項には「十一月十九日 源工衛門 彦兵衛 年

（中略）

一 造酒屋共仕込願出添証文差出之左之通

（中略）

一 下酒屋式拾本 湊村仁兵衛

一 同拾五本 同村甚兵衛（後略）

とある。これによると、湊村の酒造家として吉田源右衛門の存在は認められない。また、湊村についても旧高旧領取調帳「11」に記述はない。陸奥国で湊字がつく村は津軽郡湊村（現五所川原市）、同郡小湊村（現東津軽郡平内町）、北郡大湊村（現むつ市）の三村があるが、八戸からは離れすぎているため、本書の湊村はこれら三村のいづれでもない。

・吉田幸吉

吉田源右衛門の子。門人控では「幸吉」とあり、日記には「光吉」とあるが同一人物だと考えられる。

・宮川喜右衛門

八戸藩士系譜書上「17」によると、本書における宮川喜右衛門は五代目である。

八戸藩士系譜書上によると、その事績は以下の通り。

「五代目 宮川喜右衛門 初 八十吉 不知実名

金五両壹人御扶持

一 天明四年辰八月廿九日 家督無相違被仰付

一 同年九月朔日 子供役へ出勤被仰付

一 同六年三月廿八日 御勘定所御雇勤被仰付

一 寛政二年十一月九日 御金持勤番登被仰付

一 同三年正月十一日 御台所奉行被仰付

一 同年八月十二日 下着

一 同年閏十一月十九日 立帰登被仰付

一 同七年三月七日 下着

一 同年同月九日 御吟味添役被仰付

当御代

一 同十年正月十一日 御供登被仰付

一 同十一年正月十一日 御供下被仰付

一 同十二年正月十一日 舩御帳方被仰付

一 享和三年正月十一日 願之通舩御帳方御免

一 文化二年 御勘定所御雇勤被仰付御吟味添役是迄之通被仰付

一 同四年三月十日番台願之通被仰付」(記述を統一する為一部表記を改めた。また、「当御代」は八代目藩主信真を指す。)

この後、文化四年三月十日に六代目宮川要助に家督を譲っている「17」。上記より、山口和が会ったの北夷宮川喜右衛門は五代目宮川喜右衛門を指していると考えて良い。

・中里保太夫

中里安太夫「17、18」とも。八戸藩士系譜書上「17」には

「金六両貳人扶持

一 同四卯年正月十一日 亡父名跡無相違被仰付

一 同十二日 御勘定所御雇勤是迄之通被仰付

一 同月十五日 勤番登被仰付

一 同廿九日 爰元出立

一 同二月 上着

一 同月十八日 御台所奉行被仰付

一 同五辰年正月 右御役首尾好御免

一 同二月 下着

一 同年九月 退役願御指留

一 同月 石巻詰被仰付

一 同六巳年五月 引取

一 同七午年二月 開発掛被仰付」とある。上記「同四卯年」は文化四年のことである。中里保太夫の父親が、中里文七であり真法賢流の和算家であった。八戸藩士系譜書上「17」によると、文七は部屋住の際に算者として登用され道路整備や河川工事の検知役に任じられている。また跡目相続の後には、勘定所に勤めながら検知役を務め、算術師範にも任じられるなど特に和算に通じていた。これに関しては、八戸藩における藝事の系統と由来について書かれた藝事系統書也「19」（寛政五年）において、真法賢流として和算の項を述べている…

「真法賢流算術先師由来書上 流儀 流祖 真法賢恵賢 右法光寺弟子ニ而出家仕候由、生国三戸郡之内田子村之由申伝御座候、算術心掛、江戸表江罷登稽古仕、罷下師範仕候、奥寺茂右衛門満貞 山本万右衛門久富 右両人皆伝、万右衛門弟子 正部家作右衛門種泰 安永四未年作右衛門より流儀附属仕候、右之通御座候、六月 中里文七」

とあり、開祖真法恵賢の弟子の山本万右衛門久富、その弟子である正部家作右衛門種泰から許され安永四未年に流儀に名を連ねている。つまり、文七は真法恵賢の曾孫弟子にあたる。

奥寺茂右衛門満貞については、土屋・今井「20」を参照されたい。八戸藩士系譜書上「17」の中には享和二年十月に文七が江戸へ出立したとあるが、人づくり風土記「21」によれば保太夫も同年に和算のために江戸へ出立したとあることから父に同行した可能性があり、和算についての素養はあったと思われる。

終わりに

以上のように、本稿では文化年間における八戸とその周辺における和算家とその状況を見た。特に、山口和の道中日記の記述をもとにその経路を同定し、八戸とその周辺において交流があった人々の経歴と和算について資料をもとに調査を行った。

江戸中期の八戸には、真法惠賢に見られるような卓越した和算家がいた。しかし、真法惠賢が没して後は惠賢流（真法賢流）としてその学脈をついだが大きな発展はなく、算学書については真法惠賢存命中に著された真法弟算記と諸國神社佛閣掛所算術を見るのみで、算額についても記録上は真法弟算記に記されている五枚を見るのみである。実際、山口は高名な和算家と議論した場合や見るべき算額があった場合には、道中日記において議論の内容、算額の問題や術について書き残している。一方で、これまでに見たように、八戸及びその周辺地域においては中里保太夫らと交流があり、また吉田光吉を弟子に取ったようであるが、算学についての問答があったのかは明らかではなく、また当時は現存していたであろう算額についても見た様子はない。このような状況から、山口の目には見るべきものはなかったのではないかと考えられる。しかし、このような八戸に於ける和算の状況は神山由助が出るに及んでその面目を新たにする。神山は文政十三年に八戸藩に召され、数学師範として仕えた。神山は、安藤昌益の弟子の神山仙庵を祖父に持ち、医者の家ながらも和算家になった人物である。関流の算術に通じていたのみならず測量術にも優れ、多くの著作を残し弟子を育てた。真法賢流算術の免許皆伝書である「関流算数好一術」には、真法惠賢を始めとして、奥寺茂右衛門満貞、山本万右衛門久富、正部家作右衛門種泰などの高弟の名前が並んでおり、その最後に神山の名前が記載されている。幕末期における八戸藩の算学の状況については、神山の業績を中心に稿を改めて論じたい。

謝辞

本研究は二松學舎大学東アジア学術総合研究所共同研究プロジェクト、及び一般財団法人青森県工業技術教育振興会若手研究者研究助成の支援を受けた。

- 注
 1 ?—享保十八年(一七三三) [4]
 2 安永四年(一七七五)—嘉永二年(一八四九) [4]
 3 ?—嘉永三年(一八五〇) [4]
 4 文政三年(一八二〇)—明治元年(一八六八) [4]
 5 寛政十二年(一八〇〇)—明治元年(一八六八) [4]
 6 寛政二年(一七九〇)—明治四年(一八七二) [4]
 7 文政二年(一八一九)—明治二十九年(一八九六) [4]

参考文献

- [1] 西田知己、江戸の算術指南、研成社
- [2] 遊歴算家の事蹟、三上義夫、和算研究 八号
- [3] 佐藤雪山略伝及算法円理三台著者考、西脇濟三郎
- [4] 増脩日本数学史、遠藤利貞、決定第二版、恒星社厚生閣
- [5] 北陸道ノ和算家ニ就テ、林鶴一、東北数学雑誌四十一、一九三五—一九三六
- [6] 道中日記、山口和、新潟県阿賀野市水原ふるさと農業歴史資料館所蔵
- [7] 和算の発達・普及と地方への浸透、松崎利雄、水戸の洋学 所収
- [8] 和算家・山口和の『道中日記』、佐藤健一、関邦義、研成社
- [9] 道中日記、山口和、阿部克治謄写、日本学士院所蔵、資料番号5749
- [10] 日本学士院所蔵 和算資料目録、日本学士院編、岩波書店
- [11] 旧高田領取調帳データベース、<https://www.rekihaku.ac.jp/>、国立歴史民俗博物館
- [12] 日本歴史地名大系 第二卷青森 第三卷岩手、平凡社
- [13] 角川日本地名大辞典 二青森県 三岩手県、角川書店

- [14] 七戸町史 第二卷、七戸町史刊行委員会
- [15] 青森県史第十五卷 資料編 近世五
- [16] 勘定所日記、嘉永二年十一月一九日
- [17] 八戸藩士系譜書上、八戸市立図書館市史編纂室編
- [18] 八戸南部藩用語辞典、酒井久男編著
- [19] 新編八戸市史近世資料編Ⅲ
- [20] 真法恵賢と真法弟算記について、土屋拓也、今井悠人、八戸工業大学紀要 第四十巻、二〇二二
- [21] 江戸時代人づくり風土記2 青森、農山漁村文化協会